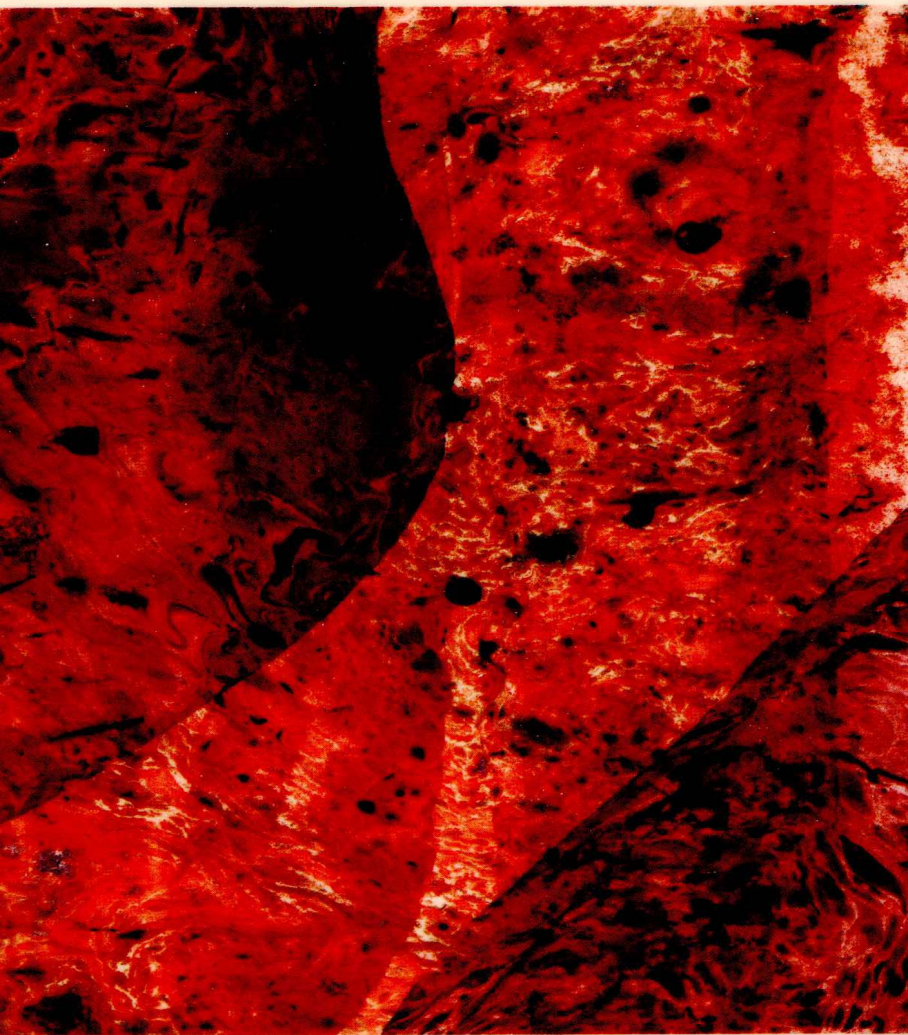


上州うたごよみ



みやま文庫

上州うたごよみ

群馬おりおりの詩

会 長	清 水 一 郎	(群馬県知事)
副 会 長	横 山 巖	(群馬県教育長)
同	相 葉 伸	(群馬大学名誉教授)
運営委員長	佐 藤 国 雄	(群馬県議会議員)
編集委員長	萩 原 進	(群馬県史編さん委員)
事務局 長	磯 貝 福 七	(群馬県立図書館長)

上州うたごよみ

群 馬 お り お り の 詩

(みやま文庫96)

昭和60年 3 月20日印刷
昭和60年 3 月30日発行

(会費年間3,000円)

編集者代表	関 俊 治
発行者代表	佐 藤 国 雄
印 刷 者	朝日印刷工業株式会社

発 行 所

み や ま 文 庫

〒371 前橋市日吉町 1 丁目14-8
群馬県立図書館内
TEL 0272-32-4241

昭和59年度第 3 回配本

序 文

伊 藤 信 吉

戦後になつて刊行された上州・群馬の文学紀行や文学案内の書は、たぶん十冊、二十冊の多きを数えるだろう。もつと多いかも知れない。歌人、俳人、詩人、作家の人と作品を論究、紹介した書もすくなくない。それらの何冊かを私は共感と郷愁を混じえて読んだが、こんど編まれた「上州うたごよみ」は副題で「群馬おりおりの詩」といつているように、四季おりおりの作品を幅ひろく採りあつめ、一篇ごとに鑑賞を付したものである。いわば風土的色彩の濃い詩歌鑑賞の書だ。

およそ詩作品を手にするたのしさは、それぞれの作品の情感や思想を自分自身の思いにまで吸収し、同化し、享受することにある。この本では各篇の鑑賞文がそのみちびきをなすのだが、しかも一つの鑑賞による享受は、時としてさらに別種の見方への導きになる。

そのようにして一篇の作品が触発する一枝、一輪、一景の美とその感銘。それはまた所々おりおりの風物の中へ歩み入ることであり、起伏さまざな生の姿とその心象

に触れることであつて、それが時間、空間にわたる多彩な作品鑑賞を成す。

生地をはなれて年ひさしいのに、その年数に比例するかのように、私は自分の意識の底に、土地の愛ともいうべきもののあることに気づいた。昔から郷土愛ということが言われるが、生地をはなれて永い私に、地元の人々に等しい生活感情のあるはずがないし、そんな潜越なことを思うわけでもない。それならば郷愁か。あるいはそうかも知れないが、それよりもっと適切な言い方は土地の愛ということである。

土地の愛といったところで、もちろん私は上州・群馬のすべての地域を訪ねたわけではない、気候風土の知識さえ乏しい。だが、詩歌、文学作品における土地の愛となれば語るべきことはずいぶん多い。たとえば前橋在住の青年時におぼえた「上州の桑原十里桑の実の赤きを喰うべて唇を染めばや」の一首だが、私は未だにこの作者を知らない。「赤きを喰^たべて」「赤きを喰^はて」のいずれが正しいかも定かには分らない。つまり私にとつては読人不知なのだが、この一首はいうまでもなく土着的であり、生活的であり、産業的ロマンチズムともいうべき抒情において、まさに土地の愛の文学の典型を成している。こういう意味での土地の愛は、この書の多くの作品に共通するだろう。

目につく作品を一つ、二つ挙げると「瀬の色の目だたぬほどの青濁り雪しろのはや交りくるらし」(江口きち)がある。利根川の雪しろ。春を告げて、それでいて冷たい色。ここでは季節の色が水の色とともに流れている。いつそう上州的な風雷テーマの作品についていえば、私の季節感には「しみじみと山の枯色に夕日さし木がらしの風打ちやみにしか」(須藤泰一郎)と、風の日のかなしい思いが浮かんてくる。雷には「甘菜野をまさに襲はむ夕立は妙義の峯にしぶきそめたり」(吉野秀雄)という壮麗な描写が目に見えてくる。これらの作品を読むと、私の土地の愛はそわそわする。

「啄木鳥や落葉を急ぐ牧の木々」(水原秋桜子)「葛咲くや嬌窓村の字いくつ」(石田波郷)など、各地のそれぞれの季節に、他国からやって来た人々の作品がたくさんある。ここに挙げた句のほか、短歌、詩にも好きな作品がある。

これらの作品は旅びとの過ぎゆく抒情でなく、おのずから上州・群馬の地に根づいた季節の花々である。これを他の土地へ移すことは出来ない。私の土地の愛はこういう作品にもつよく惹かれる。

「上州うたごよみ」という標題の上州。「群馬おりおりの詩」という副題ふうの群馬。おや、上州と群馬はどうちがう、おなじ地域名の重複じゃないか、という人があるか

も知れない。言われればその通りだが、むしろ私はこの二語重復をおもしろいとおもう。郷里のあれこれをここに描いたり、郷里にかかわる詩や文章を読んで、しばしば私は上州的特質ということをおもいある場合は群馬の風土といったことをおもう。詩・文学に行政的年代や区分と異なるところがあるのは当然だろう。

集中の短歌に「ひなぐもりうすひの坂を越えしだに……」「あが恋はまさかまかなし……」その他、万葉集からの採録がある。東歌の中でも私はこの二首に惹かれるのだが、歴史的年代でいえばこれは上野国歌である。これはこの本に集めた作品が古代から現代にわたり、そこに上野、上州、群馬の地に、絶えることのない詩的伝統があり、それが近代にいたっていつそう見事に開花した、ということを語るのである。

目

次

春の部

前山巨峰	斎藤喜博	董庵四起	佐藤垢石	横山菊崖	城上光同	村上成之	六帖園雅雄	桐淵貞山	楠部南崖	坂本雲郎	江口きち	山村暮鳥
39	36	33	30	27	24	21	18	15	12	9	6	3

福田みゑ	上野国歌	富安風生	青柳武門	長沢一化坊	狩野利房	吉田冬葉	豊田勇	北原放二	志倉西馬	室生犀星	高橋香山	倉田萩郎
40	37	34	31	28	25	22	19	16	13	10	7	4

横山見左	高橋元吉	関口忠市	小山谷茂市郎	住田三郎	島田利夫	岡田刀水士	松野自得	高浜虚子	大島亮吉	生方雨什	秩父明水	荒井静野
41	38	35	32	29	26	23	20	17	14	11	8	5

夏の部

村上鬼城	木暮理太郎	阿部鳩雨	山口寒水	与謝野晶子	奇々羅金雞	新井省三	島崎藤村	岡田刀水士	富田うしほ	高橋辰二	荻原水郷子	園田淳	上野国歌
49	52	55	58	61	64	67	70	73	76	79	82	85	88

菱花園信人	神田哲雄	栗原和子	金子刀水	荒井閑窓	豊田勇	萩原恭次郎	山村暮鳥	上野国歌	須藤泰一郎	臼田亜浪	鈴木旭山	吉野秀雄	徳富蘆花
50	53	56	59	62	65	68	71	74	77	80	83	86	89

横地尚	日本書紀	梅沢安夫	地藏和讃	富岡啓二	小淵博俊	金井岱路	桜井礼丸	新井紀一	羽鳥一紅	渋谷国忠	奈佐勝皐	堀口藍園	北上健
51	54	57	60	63	66	69	72	75	78	81	84	87	90

生田萬	磯貝雲峰
42	45

金井萬戸
43

大手拓次
44

秋
の
部

山 村 暮 鳥 136
 洪 谷 国 忠 133
 除 村 一 学 130
 竹 内 茂 登 子 127
 金 子 信 三 郎 124
 藍 沢 無 満 121
 松 野 自 得 118
 田 中 冬 二 115
 浅 茅 庵 守 舍 112
 下 平 可 都 美 109

松 本 た か し 137
 堯 野 噉 光 恵 134
 星 野 噉 光 131
 正 岡 子 規 128
 富 岡 啓 二 125
 平 井 晚 村 122
 角 田 蒼 穂 119
 石 田 波 郷 116
 関 口 忠 113
 山 口 薫 110

鎌 田 一 如 138
 前 田 普 羅 135
 藤 岡 林 城 132
 植 村 婉 外 129
 宮 崎 三 木 126
 伏 島 た き 123
 加 部 琴 堂 120
 湯 浅 半 月 117
 内 藤 鳴 雪 114
 高 柳 重 信 111

志 賀 直 哉 106
 萩 原 朔 太 郎 103
 田 村 杉 雨 100
 外 所 芳 得 97
 信 生 法 師 94
 斎 藤 喜 博 91

高 村 光 太 郎 104
 高 村 光 太 郎 101
 横 光 利 一 98
 盆 踊 歌 95
 安 藤 姑 洗 子 92

佐 藤 力 雄 105
 上 野 国 歌 102
 長 沢 延 子 99
 大 手 拓 次 96
 萩 原 恭 次 郎 93

冬の部

尾崎喜八 185
市河寛斎 182
高草木暮風 179
仁井田碓嶺 176
室生犀星 173
佐藤緑葉 170
今井善一郎 167
わらべ唄 164
平井晩村 161

室生犀星 186
村上花袋 183
田山花袋 180
武居世平 177
田山花袋 174
原三郎 171
川野辺寛 168
松井素輪 165
北原白秋 162

久保田清一 187
浅桐庵一村 184
松井水枝 181
萩原朔太郎 178
岡本潤 175
志倉為流 172
中沢豊三郎 169
萩原恭次郎 166
関口雨亭 163

西脇順三郎 157
浦野芳雄 154
天野桑古 151
高橋元吉 148
尾高高雅 145
水原秋桜子 142
田中夜舟 139

飯田蛇笏 158
若山牧水 155
秋元不死男 152
村上鬼城 149
長谷川かな女 146
川田順 143
勝山方教 140

松根東洋城 156
橋本直香 153
白石実三 150
磯部草丘 147
長谷川零余子 144
除村一学 141

無季の部

坂口安吉	十返舎一九	金風亭	中沢清	十返舎一九	平亭銀鷄	萩原朔太郎	村松秀茂	内村鑑三
235	232	229	226	223	220	217	214	211

関橋守	萩原朔太郎	生方敏郎	上野国歌	磯貝雲峰	重野安繹	根岸正吉	阿部真之助	他田部子磐前
236	233	230	227	224	221	218	215	212

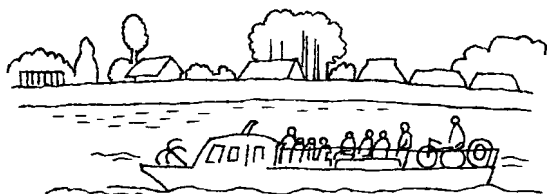
萩原朔太郎	宮部義正	岡田刀水士	橘外男	黒川真頼	島田利夫	南川潤	浅原庵糸成	高橋元吉
237	234	231	228	225	222	219	216	213

早水草之助	吉田緑泉	森田素夫	大島養平	小山茂市	赤木馬彦	長谷川零余子
206	203	200	197	194	191	188

中沢静雄	中沢清	町田一草	大木雄二	松田毛鶴	村上鬼城	清水房之丞
207	204	201	198	195	192	189

川名句一步	杉本好弘	高橋平三郎	早水城春	大沢雅休	吉野秀雄
205	202	199	196	193	190

春



ちよぢまち
とねがわ To

いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな

いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
かすかなるむぎぶえ
いちめんのなのはな

山村暮鳥

『聖三稜玻璃』(大四)所収。明治一七(二八八四年)、群馬郡群馬町の生まれ。本名木暮^{はつきやう}八九十。複雑な家庭環境と貧困のため、諸所を転々とした後、クリスチャンとなり、伝道生活を送った。この詩は「風景——純銀もぎいく」と題する十行三連の作の第一連。『聖三稜玻璃』は出版当時詩壇から悪評を浴びたが、朔太郎だけが未来派と絶賛した。この詩は一見単純なイマジズムの作品のようにでいて、心象風景として奥行きがあつて味わい深い。この一連が一枚の菜の花畑。畑いっばいに素朴、可憐な菜の花が春風に揺れている。菜の花畑のまわりはもう青々とした麦畑。どこから「かすかなるむぎぶえ」が風に乗ってくる。吹いているのは、少年であろうか。麦の茎を三センチぐらい切り取って吹くと、やわらかな、単純な音が響く。暮鳥の少年期の思い出がそこにこめられているのであろう。暮鳥の少年期は貧窮の中にあつた。それだけにこれは暮鳥が心の中に育てていた浄福の世界なのかもしれない。

(松本)

俳天地茲に開くる雪解かな

倉田萩郎

季語は「雪解」。出典は『萩郎俳句帳』（昭和一五）。この句は前橋市敷島公園に句碑（大正一五建立）として刻まれている。倉田萩郎（一八六九—一九二六）は群馬郡中室田生まれ。父は俳人久森鳥暁である。はじめ「新聞日本」に投句。ついで松山時代の『ホトトギス』に加入、以後同誌に拠った。明治三〇年「いなめの会」を結成。群馬俳壇に近代俳句の息吹きを導入した。

正岡子規が俳句の革新運動を本格的に展開しはじめたのは明治二五年。「いなめの会」はそうした風の中で生まれた。「俳天地」とは無論「俳句世界」の謂いであるが、同時に「俳句の新世界」という意味も含まれていよう。雪は融けて水になり、そのことによって新しいものの発生を促す呪力を持つ。あたらしい俳句の世界は、まさに「ここに」開けるというのである。新風をここ群馬の地に興し得たそのよろこびと矜持。その心のたかぶりは「雪解」一語になだれこむ。作者の心意は一句の表現のうちにほどよく融即し得た。「雪解」が効いているからである。

（中里）

けさよりはかけひの音もたく柴の煙のいろもはるめきにけり

荒井静野

『邑桑郡誌』にみえる歌で、閑居知春の題がある。荒井静野（一七九三—一八六八）の名は政吉、後峰次郎、襲名して静右衛門、静野は号。館林町（現館林市）の木綿問屋と酒造業の家に生れ、江戸の本居大平おおひらの通信教授を受け、後平田篤胤に師事している。襲名後は町年寄、町奉行所検断役けんたんとなり帯刀を許されている。同地同門の生田萬よさと親交、財政的支援もしている。社会事業にも貢献、天保四（一七三三）年の利根川はん濫後の邑桑郡大島村（現明和村）災害復興には私財を投じているが、このことは師大平の詠歌撰文の「三五詠歌碑」（現在明和村南大島稻荷山森尻家庭に移建）にくわしい。橘守部、岡谷繁実ら多くの国学者、歌人と交友、晩年は草陰屋くさかげのやと号し、子弟の教育と著作に専念という。『上野国神名帳考』、『上野国志』を再編したというが残っていない。昭和十一年歌集『草陰家集』が編されている。慶応四（一八六八）年没六七歳。墓は館林市本町善導寺。前歌の歌境は早春の平安そのものである。

（樋口）